

星槎大学機関リポジトリ

Title	【巻頭インタビュー】 宮澤保夫会長へのインタビュー：大学・大学院教育に望むこと
Author(s)	宮澤保夫・大野精一・松本幸広・三輪建二
Citation	星槎大学大学院紀要 = Seisa University Research Studies in Education
Issue Date	2020-3-14
URL	http://id.nii.ac.jp/1486/00000175/

巻頭インタビュー

宮澤保夫会長へのインタビュー —大学・大学院教育に望むこと—

宮澤 保夫¹・大野 精一²・松本 幸広³・三輪 建二⁴

(¹星槎グループ会長・学校法人国際学園理事長・²星槎大学大学院教育実践研究科長・³星槎大学事務局長・⁴星槎大学大学院・大学院紀要編集委員会委員長)

星槎大学は、2004年4月に共生科学部共生科学科（通信制課程）を、2013年4月に大学院教育学研究科教育学専攻（修士課程）を、2017年4月に大学院教育実践研究科（専門職学位課程）を開設し、さらに大学院教育学研究科教育学専攻（博士後期課程）が設置認可され来年度2020年4月に開設される。

大学院紀要第1号の創刊にあたり、星槎大学にしかできない、あるいは星槎大学だからできる「大学・大学院」のトータルなあり方について宮澤保夫・星槎グループ会長へのインタビュー（2019年11月6日・2020年1月17日実施）を通して明確にしたい。

【大野精一（大学院教育実践研究科長）】

1. はじめに

大野：私の認識では、今は、星槎がこれからどういうふうに進んでいくかの岐路と言うか、ターニングポイントに入っているのではないかと考えています。そうすると、もう1回基本的な理念に戻って考え、思想とか哲学のレベルで共通性を持ったものにまとまるような努力が必要じゃないかというふうに思います。そのときに、われわれも考えますけれども、宮澤会長の思いなり願いなりということをお聞きすることが、やはり出発点になるだろうという思いがあるのです。ですので、今日はどちらかというと難しい話というよりも、思いとか気持ちとかをお聞きしたいと思います。

2. 星槎の3つの約束

宮澤：ターニングポイントっていう言葉は幅広く分かりやすいと思いますが、要するにこの大学を作った意味はどこにあるのかということですね。僕が大学を作ったのは、18、19

歳から 22 歳までの人を社会資源として見たときに、進学を希望していても経済的その他の理由、事情によって、環境的に恵まれてない人たちのために大学を創るとというのが初めにありました。そしてその人達が今までやってきたことのまとめというか、それぞれの経験を学術的に検証する糸口になればいいなと思ったわけです。だから1学部1学科になる。ここが一番大切なところです。学問というのは生活の中にあるといつも言っているのですが、私たちの課題はどれも縦横無尽に関わり合っている。だから、学部制とか学科制ってあまり必要ないと思っているのです。

2点目には、最も重要視している不登校生、発達障がい生などの新しい分野の出現によって、この子どもたちとかを理解する大人を作らなきゃいけないし、それは大人の社会的な責任だろうということがありました。教育を通して大人が発達障がいとか不登校のことを学ぶ機会をつくるとともに、社会的認知をさせその対象とする子どもたちにより良い学びの環境を作ることですね。それは学ぶ権利を保証してその場面を作ることでしたし、これはまさに社会の責任ですよ。未来はこどもたちによって支えられていくわけですから。

3点目は、それに対する星槎の社会的な責任としてこどもたちと最も近い先生達に、もっと知識とその子どもたちの環境が今どういう状態にあるのかということを知ってもらって、社会を変えていかなければならない。それゆえ現職の働いている先生たちや関係者が、星槎大学で学び、それを学校で子どもたちに還元していくことがいいだろうと思ったわけです。

大野：現職の先生ですね。

宮澤：はい。学校の先生でいえば、彼らの対象となる子どもたちを積極的に学びに参加させるための技術を、どういうふう身につけなければいけないか問うということが、星槎の一番根本的なことです。その部分については、「人を認める、人を排除しない、仲間を作る」という原理原則があって、横断的にそれをやっていく。その3つを貫けば、星槎の思想的な部分というのは、先生と生徒の関係性としても成り立つし、それから学問的にも成り立つわけじゃないですか。みんなそれを理解しなければ駄目ではないかと思います。

先生は、教員免許を取るための勉強は一生懸命やります。でも先生になってからのことはあまり教わっていないわけですよ。先生っていうイメージだけで先生になられては困るわけです。自分がなりたいからなるというのは当たり前のことですが、それだけを追い掛けてもらっても困るのです。だから、現場で経験を積んできた人、それから生徒を理解できる人を育てていくのが星槎の役割になるわけです。そうすると、星槎の思想というのは、3つの約束の中から派生するいろんなことであり、そのひとつに、先生と生徒の関係性が出てくるわけです。

大野：今、お話聞いていて、人を排除しない、人を認めるって言ったときに、たとえ自分

が相手から認められなくても私は認める。たとえ相手が自分を排除しようとも、私は排除しないということでしょうか。

宮澤：そういうことです。つまり、相互で認め合えばそれでOKなのですが、最初からそんなことうまくできない。

大野：学校も、また大学にとっても、もう一度、3つの約束という共通理念に戻るということが必要ですね。



宮澤：ええ、大野先生が最初に言われた「変質」してきたものは、これは学校が変質したのではなくて、先生たちが独自に自分たちのポジションというか立ち位置を作るようになり、生徒や学生よりも自分たちが最初というふうになってきた。これをもう一度、星槎の意識を高めて、共通項でまとまっていく必要があります。

大学については、いろんな状況もあって、当初の理念がほころび始めているかもしれません。最初に大学を作ったときは、初代学長の山口薫先生を中心に、それこそ侃々諤々の議論をやりました。でも僕と山口先生では意見の相違あったけれども、ゴールは同じですよ。だから今の大学においても、本当は、みんなゴールは同じだろうと思う。けれども、大学の先生方は、自分の領域の中に入って、横断的な学習とか横断的な関わり合いってというのが薄くなりがちなのではないでしょうか。星槎の思想性と星槎の役割を皆さんが共有しきれていないところがあるのかもしれません。

大学の組織は組織として、目指すゴールはみんな同じである。同じだと思っても、その方法論はそれぞれ違うから、その違いが悪いと言っているわけではありません。議論はしていいのです。そして皆さんそれをやっているのでしょう。でも、前に進むのはむずかしい面があります。



大切なのは、いつも言っているように、星槎の思想性と社会的役割っていうのをどういうふうに自分たちでもう1回認識し直すのか。それを通して共有できる部分をたくさん作っていかなくちゃいけないでしょう。学生とか生徒たちとかを参加させる授業にしようってところが基本でしょうね。そこに共通項を持ってほしいですね。

3. 大学院に期待すること

大野：いよいよ博士課程もスタートしますが、大学院に期待することは何でしょうか。

宮澤：本来、星槎の思想性を具現化する活動をしている星槎大学の必要性をさらに高める役割が大学院で、そこは学部卒業した人達がすぐ入る大学院ではなくて、ある程度社会的な経験を積んだ方々が入ってもらって、その実践を元に検証をするということを狙った学びの場なわけですね。修士課程と専門職修士課程ですね。そこで多くの方に学んでもらっています。

そして次に博士課程を作り社会的貢献をもっと大きくするというのを考えたのです。日本社会の現場で経験をたくさん積んで実績を作った方々の、その知見を未来に伝えるために学問的に検証し言語化する環境が必要なのです。それは日本の中で言えばまさに隠れた価値ね、今はまだその経験と知見が財産として海底深くに眠っていると思ったのですよ。僕が考えてやってきたことや僕以外にもたくさんいろんなことをやっている方がいらっしゃるわけですね。それを大学院という学びの場でしっかり研究し検証しどんどん発表をさせることで、社会により貢献できればと思っているのです。社会に教育研究の成果を還元してこそその大学院ですから。

そして、星槎の大学院なのだから、ぜひ既成の概念を打ち破ってほしいと思います。

まず、迎え入れる対象が社会人なのであるから、入学試験であってもその経験や課題意識をしっかり受け取ってほしい。入学試験前の事前相談などとても重要ですね。ここに始まり、「大学院だからこう」というというようなステレオタイプな考え方はなくしてほしい。あくまで星槎の大学院であるのだから、その役割を理解した上でしっかり議論して運営して行ってほしい。大切なのは、社会人として経験を積み、学ぶ意欲を持った学生をどう指導するかです。現場を離れることなく、実践しつつ学びを続ける学生から教員も学びつつ支えて行って、特に博士課程などは、実践の言葉を学術の言葉へと導いてほしいと考えます。ですから、学生も実践をまとめて終わりにするというのではなく、実践を続けながら学んでほしいのです。やり続けることに意味があるのです。

4. 相手を理解し、関わり続ける

大野：別の方が、インタビューで官庁との苦労話をお聞きしたいというふうに言ったら、「苦労なんかしたことないよ」というふうにお答えになっていたのですが。

宮澤：大変だけれども、苦労だとは思わなかった。当然何事にも困難さはあるけれども、それはとりあえずどこかに置いて、一旦は違うことを始める。そうすると、また違った角度から解決策が見えてくるのですね。

僕は小さいときから、「人と違っている」と言われていたのですが、「君は違っているけれども面白いよね」とも言われてきた。それが、年を重ねるごとにだんだん理由が分かってくる。要するに、人をねたまなかつたということです。自分よりできる人とか、自分よりすごい特技持っている人、足が速い、算数ができるとか。「あの人はすごいな」と簡単に思えたのでしょう。それで自分のほうはといえば、興味あることばかりやってきている。

それで遅れを取ったけれども、40歳を過ぎるとそのことがすごい力を発揮するのです。多岐にわたった情報を持っているわけでしょう。知り合いもいるし、いろんな方々に教えてもらうこともできる。付き合いが5年も6年もなくても、電話をかけたなり手紙送ったりすると、喜んで引き受けてくれる。今の時代だったらメールですね。教えてもらって付き合いが復活して、何年間か付き合い合っていく。

大野：宮澤会長の重要なキーワードとして、「関わり合う学校」という言葉が出てきますね。あれは、「関わり続ける学校」というふうに読まざるを得ない。1回関わるのはそれほど難しいことではないのだけれども、どんなことがあっても諦めないで関わり続けるという意味合いですよ。

宮澤：それは気が付かなかつたです。(大笑) そう読んでいただいたのはうれしいですね。考えてみると、たしかにいつもそうだったですね。関わり続けているのです。子どもたちは、特性のある子どももいるから、学校でも社会でも素直に認めてもらえないことがある。障がいではないのに、学校では不登校扱いをされる。そのために学校に行かなくなった子どもたちが、星槎にやってくる。そういう子どもたちも、僕は、横道にそれたものをもう1回軌道修正しながら、見守り続けていた。言われるように、関わり続けていた。だから、文化祭に行くと、卒業生も僕のところにやって来る。

大野：会長さんの場合、関わり続けるエネルギーは、これが本当にやりたいことだからということがあるでしょう。もう一つ、「君たちにはこれからも、うまくいかないことがあるだろうから、自分で考え、やるべきものを見つけだしていかない限り、星槎の卒業生とは言えないよ」とおっしゃっているのではないのでしょうか。

宮澤：僕はやはり、子どもたちには生きている教本だったのでしょね。自分にもそういった特性があるということは理解できていました。学校に出て来られないのはなぜなのだろうということをみんなで考えるようになっていた。

大野：できる子と自分を比較せず、他人を「ねたまない」のでしょうか。ねたまなければ排除しませんものね。

宮澤：例えば僕は算数が苦手で、四則計算がうまくできなかつた。要するに、1足す1が2なのに、1掛ける1が1になっちゃう。2にならない。マークが変わるだけで、なんでそうなるのかが分からない。1足すゼロが1なのに、1掛けるゼロはゼロになってしまう、その

理論が分からなくて混乱してしまうわけです。それでも、僕の頭の中にはたくさんの指があったから、ゆっくり時間をかけるとできてしまう。みんなが10問やる間に3問ちょっとしかできないけれど、時間をかけると解ける。僕はそれで満足しちゃうわけです。できる子をねたまない。それが僕のすごい特性でしょうね。

加えて落ち着きもなかった。その3問が自分の中でできれば、もう外に出て行ってしまおう。4年生のときには常に廊下に立たされていても、なんでここに立たなければいけないのかなと思っているうちに、チョウチョウが飛んでくると、チョウチョウと遊ぼうって出て行ってしまおう。怒られてまた同じことの繰り返し。おしっこしに行きたいとなると、おしっこに行っちゃおう。そういうときに限って先生が、「またいないな」とか言ってくる。親が呼び出される。「あの子は一体何を考えているのだろう」となる。

でも、5・6年生の時の担任は「いいよ」って言ってくれたのです。先生によって全然違うわけじゃないですか。「チョウチョウ生きたまま捕まえてきていいよ」とか言ってくれたのです。「トンボを捕まえてきたら」とか言って紙袋を貸してくれる。先生が気遣ってくれる。いつもならドッジボールとかをやるのに、きょうは昆虫探しとか言ってくれたりする。ぼくにとってはとっても、すごくいい先生でしたね。(笑)

5. 生徒の特性を見抜く

宮澤: 星槎というのはやはり、相手を認めるところから始めないと駄目だということです。意見が違って認めること。そうして風通しを良くしていくことでしょう。

生徒はそれぞれの発達過程にあって、だれ一人として同じではない唯一無二の存在です。この至極当たり前のことを大人たちはつい見過ごしてしまうのです。

とある大学の授業に、星槎の数名の高校生たちが出させてもらったときのことで、先生が「この子はすごい。勉強しているんだよね。でもね・・・」と言う。どうもその分野しか分かってない。他の部分はまったくといってよいほどできない。

でも彼は、自分より年上の学生たちと仲良くしてもらって、お昼も一緒に食べて、その分野の話をしているし、「僕が知っている部分のほうが多かった」などと言う。そこで次は、相手の学生も勉強するわけです。その雰囲気はとていいのです。最初は、「あいつは高校生のくせに生意気だ」でしたが、そのうちに、「言っていることは大したものだ」に変わっていき、全体で勉強しなければという雰囲気になっていく。

同じような事例ですが、星槎でも、同じような入学生がいて、校長先生はそれを目論んでいたのでしょうか。入学したときは、「大学なんか行かないよ」だったのですが、国立大学は無理だったけれども、受験科目が2科目で入れる所があって、勉強したらちゃんと大学に合格して、しっかりやっているのですね。どこで学ぶかより何を学ぶかで選んだ大学が学ぶ所だったのです。高大連携の良いあり方ですよね。



だから、星槎大学や大学院、どの大学で学ぶかではなくて、その中で何を学ぶかが重要な学校にしたいわけですよ。経験を通した中で学んでいく。生きてきた人生の中で自分がある部分をもって節目を付けて、学ぶことに対する自信をつけるとかです。

6. 相手を認めた上で「でもね」

大野：相手とのやりとりの中で。

宮澤：教える側の先生たちも擬似的にでもいいから生徒の心をつかむというか、そのような方法を使ってみていただくこと。それがうまくいってくると・・・。

大野：大学院でも変わりませんね。

宮澤：変わらない。たぶん変わらない。だから、例えば向こうが何か異論を唱えてくることあるでしょう。自分の経験からすると、何を言っているのだろうくらいの思いがあっても、まずは、「そうですね」と言ってみる。そのときの相手のポイントは何か。その人は学問的なことを聞きたいのか、自分が経験したことの優位性を説きたいのか。だから、「そうですね、でもね」という、「でもね」が必要になる。反応してくる人には、「そうですね、でもね」を言い続けると、こちらはどこかに余裕を持つことができる。

大野：認めた上での反論。反論までいかないけど、認めた上で・・・。

宮澤：「何が言いたいのかな、あなたが言いたいのはこの点でしょう、それは自慢話ではないですか」ということを遠回しにどんどん言っていくわけですよ。

大野：大学院の指導も同じですよ。認めた上で・・・。

宮澤：同じです。だから、僕は64歳で早稲田大学の大学院に行きましたが、そこには、45歳とか50歳ぐらいの、働きざかりの方々も来るわけです。「自分はこの経験してこんな経験して」と言うわけですね。それでも先生に、聴き上手の方が1人いました。「すごいね、皆はそういう経験はしてないよね。僕だってしてない。けどそれは・・・」みたいな話

をしている。

その先生が「この分野、宮澤さんのほうが得意だからちょっと話してみてくださいか」と言ってくれるわけです。「しゃべっていいですか、何分ですか」。「20分かな」とか。でも実際は20分以上しゃべってしまう。僕はおしゃべりだから。先生に、「まだ大丈夫ですか」と言うと、「きょうはもっとしゃべってもいい」という返事が来たりする。そうすると、学生たちも年は違うけど距離感が近くなるでしょう。お互いに学生という立場になっている。そうすると、先生に聞くような質問ではなくて、生き方だとか、なぜそこに気が付いたのかといった、直線的なやりとりになっていく。先生はそのあいだ、ただにこにこ笑って聞いているのです。先生はそのときに締め言葉を考えているわけです。少なくとも10分前になったら、「宮澤君、きょうはそこまでね」と言われる。「はい」と言って終わると、みんなからは、「今の話は、しゃべり過ぎだよ」などと言われる。先生は、「まとめるところだね」と言って下さると、みんな納得する。

大野：会長さんのイメージの中で、大学は閉ざされたものじゃなくて、どちらかというと自由で開放的でいろんな価値基準があって、それぞれの人が有意義だと思って、自分の物の考え方をまとめたり統合したりして、さらに新しい生き方へ向かっていく場だと。

宮澤：学生は社会人が多いので、みんな、自分の生き方に自信を持っているし、足りない部分を学びに来ているわけでしょう。それなのに、「君と僕の考え方はここが違う」などと断定的に言ったら、その人のプライドが否定されることになる。みんな生きている限りは、それぞれに特性があるわけですよ。だから、それを、「君のその考え面白いね」と一言で言うわけ。「だけどもね」というのが必要になる。

これは、大学院だけでなく、学校でも、生徒に怒るときの基本的な仕組みです。いきなり怒るのではなく、「どうしちゃったの」とって声をかけて、聴いていく。「そうかそうか、だけどもね」とって言うと、子どもたちは「はい」とって言うことを聴く。

だから、発達障がいのあるアスペルガーの子どもたちと特に仲がいいっていうのはそこにあるのかもしれない。とにかく聞き倒すこと。その上で、自分の意見もちゃんと言う。こっちの意見も。だから、向こうは言うことで発散しているし、僕たちのほうは聴く係になる。相手の立場に立ったときに、落ち着いたときにこっち側の立場を言うようにする。向こうが興奮していたら、まずは相づちを打つ。だけど、向こうは論理的でないし、考えが飛躍してしまうことがあるわけです。「さっき言ったことさ、もう1回説明してくれるかな」と言うと、そうするとうっとなって言葉がつまるじゃないですか。

僕なんかは塾をやっていたので、それをできるようになったのだけど、もしいきなり大学を卒業して学校の先生になっていたらできないでしょうね。それは当たり前の話ですよ。だから、できないことが悪いのではなくて、何を相手が言わんとしているのかを聴き

取るという自分なりの意識と行動を試してみることが大切ですよ。

そこでのポイントは一つです。相手側の立場になって考え、何か違うなと思いつつも、「もう1回、言いたいことは何が言いたいのでしょうか」みたいに返していく。向こうも落ち着かなくなるわけですよ。そうすると、言いたいことの断片が繋がってくる。こっち側で仮説を立てながら話してあげると、だからものの10分もかからないうちに落ち着いていく。

7. 身近な問いから研究テーマを

大野：相手に嫌われることを怖がったら、駄目なのですね。

宮澤会長は本の中で、学問の出発点は身近な問いだということを言われています。大学だろうが大学院だろうが、身近な問い、根本的な問いを持つということです。会長が修士論文をお書きになったとき、いろんなことをお書きになったかと思いますが、身近で、根本的な問いというのはどこにあったのでしょうか。

宮澤：一言でいえば、「人がどのように変わっていくのか」「組織がどのように問題を解決していくのか」ということでした。つまり、不登校で学校行かなかった子どもが、スポーツに興味を持っている。コミュニケーションの苦手な子どもがスポーツを通して変わっていく。こうした様子について調べてみたかった。僕がうれしかったのは、自分の学校の振り返りができたということですね。それも、社会的状況、経営的な思想性を学ぶことができたことには本当に感謝です。

そういう根本的で身近な問いが、学問をする以上ベースになります。だから、大学院教育も、表面的には先行研究と称して、学者の名前を取りあげるなどしますが、指導する先生としては、この院生にとっての身近な問いは何だろうという点に注目しなければならなりません。大学院教育の原理原則として、何を表現したいのか、それを理解してあげることでしょうね。

僕は、文章をまとめるのがあまり得意ではありません。頭で考えているとどんどん進んでいって、書く手が追いついていかない。だから、手がしびれるわけです。けいれん起こすわけですよ、書いていると。そのぐらいのスピードだったですね。

大野：そうでしたか。

宮澤：もっと時間があって、2年間かければそんなことはなかったけど、1年間で39単位を取るとなると、そのぐらいのスピードでしたね。何科目か落とすかもしれないと思ったので、恐怖心があって、とにかく取れるまで単位を取ってしまおうと思った。それでも、最後は、褒められたのですが。スポーツ・ビジネスと学校経営ということで、その成功例

と言う評価になった。

他の学生にも授業の中で私の言ったことや発表したことがとても役立ったと感謝されたこともありました。やっぱり関わり続けるというのは、すごく楽しいですね。



大野：その関わり合いも、いい格好はしないで素直に率直にということでしょうね。

宮澤：だから、もしいい格好というなら、みんなが笑顔になるような方法を考えることがいいなと思う。やっぱり対象となる人たちにその笑顔が伝播するというのが、僕はうちの組織の役目だと思う。だから、やっぱり皆さんが相対する人たちの中にいろんな方がいるとしても、それは

それで認めなければいけないでしょう。それは厳然たる事実だし、そこを文句言っても仕方がない。何とか気付いてもらおうとね。

大野：大学・大学院での社会人の学びですね。

宮澤：そうです。学問は生活であり、より広がりがあるはずで、例えば星槎大学の学部でのそれぞれの学びの関連付けをすることで、その学びの結果、社会に必要とするものが見えてくるはずで、それを掘り下げてそこを深めていくことは大事だと考えています。そこに星槎の大学院の役割があるのではないのでしょうか。

掘り下げるには、実践と学びの絶え間ない循環が必要で、学び続けること、実践をし続けることによって、雪だるまのように大きく芯は強いものができてくるはずで、深く濃く生活や社会に必要なことを考える実践であって、そんな思想性がある生き方を大人が続けることが重要ですね。

このような社会の創造に大学院が貢献してほしいと願っています。

そして、学位の先にある自分の人生の追求をし続けてほしい。そして、共生社会の創造に力を注いでほしい。

8. 皆で考える星槎グループ経営

宮澤：僕があと言いたいことは経営のことです。今、僕がなぜ今度理事長に戻ったかという話は、一番大切ではあるけれど、要は、作った人間じゃない人がこれだけの大きくなった組織を経験もなしにはできないですね。どんなに僕のそばにいたとしても、同じことをやってなければ、一緒に付いてやってなければできない。

だから、それがあから幼稚園、幼児初等教育の初めの部分と一緒にする法人にしたほ

うがいいのかとか。

大野：ピーターパン幼稚園ですね。

宮澤：ピーターパンです。あそこもすごく大変な思いをしながらも、園舎を二つ大きいのを建てたわけじゃないですか。三島も青葉台もです。そういうことは認めてあげよう。それから、中学校、高校のほうはやっぱりひとつにまとめなきゃいけない。大学院は大学院で自立してできるようにしなければいけない。風通しがいいとか悪いとかじゃなくて、運営することに、全員の先生たちが、みんなが責任を持ってほしい。一つにならないと運営できないですね。

それから先生が、例えば僕なんかは国際的な部分って非常に興味あり、環境的なことと関わり合い、だからはっきり言えばあの大学は自分にとって必要だ、生きていく上に必要だと思われることでしょうね。子どもにとっても大人にとっても。そういう形にすることによってちゃんと自分たちで自覚して、自分たちで自立するっていうことになっていく。

問題は、自立するためには努力を続けるということがとても大切なことだということなのです。意地悪く私が言っているわけではなくて、そうしないと自分たちで自主的に動くことはできないわけじゃないですか。言った人間が、やろうとしている人間が責任持って、それをみんなが応援する。

9. 現場主義と行動力

大野：全員が当責任をもって関わっていく。

宮澤：一言でいうと、現場主義ですね。現場が大切で、僕からしてみれば、皆さんがとっても重要になっている。皆さんが今まで経験を積んでやってきたことっていうことをうちの学生たちに伝えなければいけない。学部でも大学院でも同じですね。関わり合い方と内容が違うだけで。その重要性を理解しないと駄目だと思う。

大野：最後に、これからのことで、お書きになった幾つか本を読むと、地域とかコミュニティーとか全体に開かれていくというふうなことを必ず言われている。その辺りは多分会長の根本的な思想にあって、やっぱりそこに根差さないやつは駄目なんじゃないかと。

宮澤：思想的なことだよな。

大野：思想があって、原初的なって言っちゃ変ですけど、根本的な土臭い思想があって、それを行動に移すわけですから揺るぎがないですね。

宮澤：揺るぎがないな、全然揺るがない。

大野：ゲバラが好きだっていうことを、最後に聞いたかったのですが。地域とか土地とか思想・・・。

宮澤：彼のものは、思想というよりは生き方です。革命の初めの段階では裏切り者がいて

失敗したのだけでも、そんなことは物ともせず、進軍を続けていく。そして、数少ない兵隊さんの中から、教育ができる人、看護師のような人を集めていく、その先々で必要とされる人を置いていくわけです。そうすると、3カ月ぐらいで仲間は1万人ぐらいになっている。相手の兵士、敵側の政府軍が来ると、その中で、この国を良くするためにと考える人は来なさいと言う。家に帰りたい人は帰っても良いと言う。その中で「教師だった人」「〇〇の人」とまた各村に応じた必要な人を置いていく。その繰り返しをしていくわけです。すごいことです。

しかし、彼は初めは医者としてかかわっていたけれども、立場を変えたことによって、いわゆる政治的な思想性を言わなきゃいけない。あれは、彼にとってはつらかったんだと思う。やっぱりどこかで人の役に立たなきゃいけないと区切りをつける。自分の生き方はこうであると。

だから、「行動せずして挫折することを拒否する」というあの言葉に、僕は16か7歳のときに感銘を受け、しびれるような刺激を受けたのです。俺たち何もやってないな、ベトナム戦争反対だなんて言ったって、行動を起こせていない。ゲバラをみて「俺達も少しは行動して、社会に問題提起しなきゃ」みたいに動かされるんです。17、18、19歳になってくると、もうちょっと元気良くやってみようかなって思うようになるわけです。だけど自分が考えていることを、人を傷付けないで進める方法、やったとしても人が傷づかない部分でやるとか、すごいみんなには気遣って。行動しているうちに色々な人が集まってきました。その中には中学生もいたし、一般の市民の団体だから、おじいちゃん、おばあちゃん、戦争で自分の息子とか、空襲で亡くした人たちも入っているから、気遣ったのですね。やはり行動する上に何が必要かという、それは思想だと。でもそれは、政治的な思想性より生きる思想性のほうが豊かだということ考えたわけです。



僕はあの人のことを兄貴から本借りたり買ってきたりして知っていきました。ゲバラのことを読んでみると、ゲバラ日記も訳し方で全部違うんだけど、根本的に分かったのは、なぜ彼がキューバという国に参加したかということです。革命っていうことになってそれから自分を必要としている人がいることも分かった。じゃあできてから何やったか。工業大臣をしたり。

大野：銀行の総裁もやりますね。

宮澤：銀行の総裁やったりしたでしょ。あ、銀行の総裁やったときに、サルトルとボーヴォワールに会って多くの問題点について話し合いました。

彼は、キューバは経済封鎖をされていて、金がない。でも、一番大切なのは、生きるために大切な食べ物と医療である、教育であると考えていました。

僕は、彼のまねをしているのではなくて、自分でできることは何なのかと考えてみました。学校を作ったときも、だから国際学園っていう名前にする。いずれは、本当の意味での国際貢献をしたいという思いを込めています。だから、今多少無理をしてでも、そうい



った国々の留学生は迎え入れたい。きっといつの日か彼らは自国のその分野で指導者になる。そして彼らが星槎と自分、日本とその自国のために役立ってくれるはずですし、そうあってもらいたい。つまりは将来の関係性のことなのです。それをや

りたいだけなのです。社会に自分ができる中での思想を通じた表現の具現化ということです。思想の具現化だよ。表現したって言葉だけじゃ駄目だということかな。

大野：やはり行動ですね。

宮澤：だから、行動を起こしたい。そのための礎が欲しいということですね。信念っていうのかな。みんなからは宗教に近いのではないと言われることがあって、たしかにそうかもしれない。でも信念ですね。その中に、ゲバラの生き方があるのかもしれない。そうすると、自分の生き方の中に、根拠ある自信はないけれども、根拠ない自信が出てきても怖くないと思うようになる。大体みんな自信って根拠ないのにあるわけですよ。俺はこれだけのことをやろうとしていると！正しい正しくないではなくて、また根拠はないがやってみなきゃと考えてしまうんです。

最終的には行動に結実しない限りにおいては思想っていうのは一体何だろうかということですね。

大野：行動と結びついた思想だということですね。

宮澤：自分でできる範囲内でいいわけですよ。だって、僕はかつてできなかったから、その時々のあるべき姿で自分ができる行動をしてきた。今こういうふうな状態なので、その中でできる行動を今全力でしている。全力で行き切るということですかね。

大野：本日は、ありがとうございました。

(記録・編集 三輪建二・松本幸広)

宮澤会長インタビューを終えて

(大野精一)

星槎グループは、小学校を除けば学校教育法が規定する幼稚園から大学院博士後期課程までのすべての課程を有する学校群となった。これからさらなる発展を期するために、次の二つの視点が重要となることを会長インタビューは明らかにしている。

第一に、星槎の教育を持続可能にするためのハード面での展望である。このことについては、既に財務面からの検討が会長特命で着手されている。

第二に、これらの学校群の学びに通底する思想や哲学である。近代において知のヒエラルキーやモノポリの象徴あるいは権威としての大学は、ある面で知の危機や解体を招いてきた。知はもっと創造的で生活や地域コミュニティに根ざした生き生きした実感を持ったものであるはずである。

このインタビュー全体を通して宮澤会長はこのことを熱っぽく語っている。

一方で、思想や哲学に基づく実践が行われて一定の成果が出たとしても、それが未来に向けて持続可能なものとならない限り消えてしまうものである。他方で持続可能となったとしても、創造的に成長する思想や哲学の更新なしには、単なる旧来からの実践の精緻化でしかない。

今後、星槎の教育は上記の二点の同時あるいは共時的な実現（スパイラルな展開）をめざすべきことを宮澤会長は示唆している。

社会人の学びと学び合いの視点

(三輪建二)

大学院紀要第1号の冒頭をかざる会長インタビューということで、編集委員長の立場からインタビューに同席した。専門の生涯学習論の立場から、2つ感想を述べてみたい。

まず、「相手を認めた上で、でもねと自分の意見を述べる」というくだりは、「おとなの学びと学び合い」をめぐる私がいつも考え、実践していることで、我が意を得たりの思いがあった。社会人は自分の生き方に自信を持ち、豊かな経験を持っている。大学院では、参加者が経験を交流させ、お互いから学び合う時間を尊重したい。ただ経験談で終わるのはもったいないので、相手を認めた上で、「でもね」と自分の意見を主張していきたい。

次に、「身近な問いから研究テーマを」という考えも、日ごろから大事にしていることで、心から感銘を受けると同時に、星槎大学大学院だからこそ深く探究できることだと思った。

先行研究から入るのではなく、身近な課題から問いを立てて深めていく。もちろん、先行研究も何らかの研究方法も必要であるが、それらが先にあるわけではない。研究の成果も、学術の発展以上に、現場や社会に還元していくことが大事になる。研究の進め方やプロセスに迷う社会人大学院生には、会長の言葉を紹介し、また私たち教員も肝に銘じたい。

博士後期課程の基本理念が見えるインタビューで、本当にありがたい時間であった。

宮澤会長インタビューの向こうに

(松本幸広)

学問とは

宮澤会長の話は、「誰が、何のために、何を学ぶのか」という根源的な視座を常に持っていると感じる。そこには「生身の人」がいて、まさに「現場」があって、常に「実践」が繰り広げられている。

そこに、主体的に参加して学ぶ (PAL: Participate and Learn) ことをすべてのひとが、すべての場面で、幼稚園でもあり大学院でもあり、すべての立場で実現していくことの重要性が伝わってきた。

社会人の学び

社会人として生活している学生の、唯一無二のそれぞれの経験をどう活かすのか。まずは、「人を認める」こと。相手が何を言いたいのかまずは受け止めることの重要性が語られた。学び続けることは、よりよく生きることであり、よりよい社会を創っていくことにほかならない。

実践

常にやり続けてきたからこそ今がある。常に何が社会に必要か考え、常に創り続け、実践をし続けてきたことが現在に繋がっている。言っているだけでなく、実践するということは星槎の星槎たるゆえんと再認識した。批評家ではなく、常に当事者であり続けること、まさに PAL ということ。

生きるという思想性

生きるということは行動するということと同義ではないかと考える。そしてその生き方こそが思想性。あっちのことではなく、常にこっちのことと考え、何が自分にできるのかを真剣に考えなければならない。

近代で失ってきたもの

近代教育システムの頂点は大学教授になることであり、資本主義の頂点は大金持ちになることであるのか。

ヒトがヒトらしく生きることと近代教育がはたしている機能の間の溝を感じないわけにはいかない。それは、私達一人ひとりの中から生まれる、近代で失ってしまったものを求める心の声なのかもしれない。きっと近代で失ってきたものは人の中にある。

星槎は多様な人々が共に暮らす共生社会を創造するためのものでありたい。